博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	中 門 亮 太
論 文 題 目	瘤付土器の民族考古学的研究—東北地方縄文時代後期後葉の土器編年と社会—

審査要旨

本論文は申請者が修士課程、博士課程を通じて一貫して調査研究してきた東北地方縄文時代後期の土器型式に関する論考である。土器型式の実態の解明を通じて、背景となった縄文後期社会と土器製作者集団の動きを探ることを論旨とする。

本論文は、第Ⅰ部「瘤付土器の編年研究」、第Ⅱ部「瘤付土器の地域性と社会」、第Ⅲ部「土器づくり民族誌からの視点」の三部から構成される。第Ⅰ部「瘤付土器の編年研究」では、土器型式の地域性に基づいて、東北地方を東北北部、東北中部太平洋側（仙台湾周辺）、東北中部日本海側、東北南部の 4 地域に分け、それぞれの土器型式の変遷過程を 4 段階の変遷区分に分けて編年的に考察した。第１章「仙台湾周辺地域における瘤付土器の編年」、第２章「東北地方北部における瘤付土器の編年」、第３章「東北地方中部日本海側における瘤付土器の編年」、第４章「東北地方南部における瘤付土器の編年」において東北地方の４地域区分ごとの型式変遷と並行関係を探る地道な編年作業を通じて地域性を明確にし、第５章「東北地方における瘤付土器の展開と編年研究」において、東北地域全体の編年的考察と地域間の影響関係をまとめる。

従来、当該地域の土器型式学は、仙台湾周辺部の研究に重点が置かれ、それ以外の地域の変遷過程は十分に解明されてなかったが、申請者は青森県、秋田県、岩手県北部などの東北北部を拠点として、近年、同地域に蓄積した多数の資料を分析することから出発する。まず、一遺跡内の土器群を器種・器形、文様帯、文様要素等の視点から丹念に吟味整理したうえで、次に近接遺跡における土器群の綿密な個体比較を実施する方法で、一地域の土器群の実態を浮かび上がらせた。これら一連の手続きは地域圏の細別を伴い方法論的に手堅いものである。

第Ⅱ部において、４地域間の型式の様相を探り、文様描出手法や三叉文、刺突・刻目文などの文様要素を手掛かりに地域性を明らかにする。地域性を土器製作者集団の違いと措定し、瘤付土器における地域集団間の交流について、遠隔地出土の土器を取り上げ、北海道から東北北部への土器の移動、また東北南部から関東、東海、関西への移動、逆に関東から東北南部への移動、北陸から東北中部日本海側への移動を示す資料を綿密に検討し、土器とヒトの移動を考察した。東北地方から地域外の遠隔地にもたらされた微隆起線注口土器や高石野類型注口土器、高石野系広口壺などが、主に祭祀・儀礼用の器種を中心とすることに注目し、後期社会における祭祀・儀礼の重要性を見出している。祭祀・儀礼の機会こそが遠隔地間の土器の交流を促進させ影響関係をもたらす原因であり、折衷型式が生まれる際の重要な契機になったことを仮説として提示する。

第Ⅲ部においては、縄文社会と同等の発展段階（氏族制部族社会）にあるパプアニューギニア、ミルンベイ州イーストケープにおける家庭的土器生産の民族誌調査の成果に基づいて、異系統土器の流入などの土器現象を理論的に理解する。中門氏本人がパプアニューギニアに分け入り、ワリ島で生産される大型土器が、海を隔てたイーストケープに齎されて、「トレハ（葬送儀礼）」などの祭祀・儀礼に使用される実態を明らかにし、祭祀・儀礼こそが土器が遠方に運ばれる直接の契機であることを民族誌の上から証明した

イーストケープの土着土器の分析と、遠隔地のワリ島からそこに搬入される土器の分析から、それらが「トレハ」と称する葬送儀礼・祭祀の機会にもたらされ、ワリ島の土器の模倣を通じてイーストケープ地方の土着土器との間に折衷土器が生み出されることを実証する。

本論文の中心課題は、第Ⅰ部、第Ⅱ部で多くの紙面を費やしたように、後期土器型式編年の整

氏名　中門　亮太

備と型式学的理解にあり、また一方において、土器型式が一地域を超えて広域にわたって拡散する現象の理論的解釈にある。なぜ東北地方、関東地方から東海、関西、中国地方に土器が持ち運ばれたのかの理論的解明のために、申請者はパプアニューギニアの土器製作をめぐる 10 年近くの民族誌調査から同様の現象を抽出し、それが惹き起こされる共通の契機が葬送儀礼・祭祀であることを見出し、縄文時代後期と同じ位相の中に解明の端緒を見出した。

中門氏の積極的な研究姿勢の背景には、従来の土器型式研究が持つ限界と未検証の仮説に対する鋭い批判があり、土器型式学だけでは土器に関わる諸現象や縄文社会は解明できないという、長年にわたって考古学界が抱えた学術的ジレンマに対する相克的な視点があり、それを俯瞰したうえでの課題設定であった。

土器にまつわる様々な現象を縄文人の行動系として捉えなおし、製作者の手を離れた土器がどのような脈絡で遠方に運ばれ、その地域でどのように使用され模倣されるのかを、実際の民族誌の観察から解明するものであり、その新たな方法論は従来の実証性とは明らかに異なる次元にあると評価される。

海外の民族誌を実際に調査して、それを縄文時代の土器現象と比較する民族考古学的方法は日本では初めての部類に属す。その前向きな研究姿勢は新たな研究領域を開くものとして審査員全員が高く評価する点であった。

また本研究を支える民族誌に基づく比較研究の視座は、現在展望できる範囲において縄文社会の解明へ向けた重要な方法論の一つであるとの適切な評価も審査会で共有された。

しかし、審査委員会では全く問題点が指摘されなかったわけではない。地域性を論じる際に、宮城県田柄貝塚の土器群は、仙台湾として位置付けるのではなく三陸海岸部の一員として見るべきとの見解や、山形県下叶水遺跡資料は山形県下よりもむしろ新潟県元屋敷遺跡の土器群との関連で把握すべきであるとの指摘、さらに研究の中心が精製土器に限定されており、粗製土器の研究も加味すべきとの意見も出された。それらは今後の検討事項として継続されるべきことが確認されたが、本論の成果についていささかも瑕疵となるものではないことを合わせて確認した。

以上の理由から、審査委員会は本論文が博士学位を授与するに相応しい論文であると全会一致で認めた。

公開審査会開催日	2017 年　6　月　3　日			
審査委員資格	所属機関名称･資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院･教授	高橋　龍三郎	先史民族考古学	
審査委員	早稲田大学文学学術院･教授	新川　登亀男	日本古代史	博士（文学）早稲田大学
審査委員	早稲田大学文学学術院･教授	長崎　潤一	北方先史考古学	
審査委員	山形県埋蔵文化財センター･調査研究専門員	小林　圭一	先史考古学	博士（文学）早稲田大学
審査委員				